

尾瀬ネットワーク通信

2003年12月10日 VOL.6, No.3(17)

尾瀬自然保護ネットワーク



秋色の笠ヶ岳 (撮影・永島 勲)

NPO 認証取得で これからが正念場

尾瀬自然保護指導員ネットワークが6月に東京都知事に申請していた特定非営利活動法人(NPO)の認証が八月にOKとなり、九月四日の登記完了により、同日から新組織「尾瀬自然保護ネットワーク」が誕生しました。ネットワークの発足から八年目、法人化の検討を始めてから三年目です。早くたつたような違かつたような複雑な心境です。いちおう体制が整ったことでホッとしています。実はこれからの会の運営の正念場だろうと思っています。

尾瀬自然保護指導員ネットワークが6月に東京都知事に申請していた特定非営利活動法人(NPO)の認証が八月にOKとなり、九月四日の登記完了により、同日から新組織「尾瀬自然保護ネットワーク」が誕生しました。ネットワークの発足から八年目、法人化の検討を始めてから三年目です。早くたつたような違かつたような複雑な心境です。いちおう体制が整ったことでホッとしています。実はこれからの会の運営の正念場だろうと思っています。

尾瀬自然保護指導員ネットワークが6月に東京都知事に申請していた特定非営利活動法人(NPO)の認証が八月にOKとなり、九月四日の登記完了により、同日から新組織「尾瀬自然保護ネットワーク」が誕生しました。ネットワークの発足から八年目、法人化の検討を始めてから三年目です。早くたつたような違かつたような複雑な心境です。いちおう体制が整ったことでホッとしています。実はこれからの会の運営の正念場だろうと思っています。

(高橋喬)

理事会だより

例年幹事会は秋の現地活動終了後に反省会として開催されてきたが、本年度は2003年9月4日にNPOとして登記されたのを受け、9月27日に東京にて開催された。幹事会(今回より理事会へ変更)の出席者は高橋(喬)、磯部、永島、佐藤、椎名、大橋、坂本、磯部、若松の9名、欠席者は山本であった。第一回目の理事会の主な議題は左記のとおり。

ネームプレート ワッペンについて

NPO化により会の名称が「尾瀬自然保護ネットワーク」へと改称されたため、旧名称がぎざまざれているネームプレートやワッペンについて検討の必要がある。旧ネームプレートには氏名が書かれているが、本人であるかどうかの確認ができないという問題があり、

NPOとなったことにより責任ある行動をするべきであるとの観点から写真付きのネームプレートへと変更することにした。また、新しいネームプレートについては現地調査・活動参加者への配布を原則とすることにし、現地活動参加時に担当理事より配布していくことになった。現地活動参加前に事務局まで写真(縦35シ×横25シ)を送付してください。

ワッペンには「指導員」の文字が入っているが、指導員研修終了者の印として利用を継続していくこととした。現在はまだ非指導員の会員がいないが、近い将来指導員養成講座未受講者修が現地活動に参加することとなった時、または現在のワッペンの在庫がなくなつた段階でワッペンの取扱について再検討する。

組織の拡充 強化について

NPO法人格を取得するまでは、個人活動中心で会を運営してきた。しかし、今後の活動では個人で対応するには法人格取得団体としては不適切であるため、部制を導入し、複数人体制としていくこととなった。体制についての最終決定は次回の総会にて決議することを予定しているが、理事会にて検討されている案の概略は左記のとおりである。

(1)理事長の下に「調査・指導部」「普及・事業部」を設ける。調査・指導部は調査活動、指導員養成活動等を担当、普及・事業部は現地活動等を担当する。

(2)事務局内に「財政部」と「広報部」を設ける。財政部内には「会計」及び「財政担当」を設ける。広報部は会報紙等の情報発信を担当する。

法人化にあたっての 活動方針について

例年の秋の理事会では同年度の活動内容について各担当理事から報告を受けたうえで、次年度の活動方針について再検討を行っている。本年度は最終の福島側での活動が終了していないが、理事会の時点までの状況をもつて、来年度の活動内容について話し合われた。

群馬県側の活動は現在調査活動が中心となっている。その調査活動の一つとして尾瀬ネット設立時より継続している至仏山東面道調査を本年度は夏と秋の二度の調査を行えるまでになつており、来年度も継続していく。

もう一つの調査活動である尾瀬ヶ原シカ調査は昨年度より尾瀬高校が参加し、共同で実施されており、本年度は春の調査は十一名、秋は十五名の参加者で行われた。尾瀬高校既に尾瀬ネットが学んだ調査方法について単独調査を行うことができ

きるまでになつており、今年からは尾瀬高校が教科の一つとして尾瀬ヶ原のシカ調査を取り入れている。尾瀬高校は現地に近く、多くの調査を行うことができるため、今後はシカ調査を委譲することとし、尾瀬ネットの尾瀬ヶ原での調査活動は中断することが決議された。しかし、いまままでに培ったノウハウを維持するために調査活動を継続するべきとの意見が出され、今後は尾瀬沼側でシカの調査活動ができないか検討していくことになった。

福島県側での現地活動として、会津バスに協力頂いて行っているバス添乗解説および御池バス停付近に案内所を設置して活動を行っている。本年度も予定どおり全6回、延べ十三日、延べ参加人数六三名と多くの参加者があった。バス添乗解説活動は片道約二十分と短時間ではあるが、入山者に対して尾瀬の大切さを訴える絶好の場であるため、来年度も継続して活動を行つ

ていく。

しかし、福島側の活動は参加者が固定化されてきてしまっているという問題が発生している。そのため、来年度からは春秋1回ずつ現地研修会または観察会等を兼ねて実施することを検討する。

本年度の自然保護指導員養成講座は例年開催案内を掲載していただいていた雑誌に掲載されなかったというアクシデントがあったためか、申込者がなく残念ながら中止となった。

今まで開催されてきた養成講座は当会の会員になるために必ず受講していただくことになっていたが、NPOとなったために養成講座を受講せずに会員となれる方法の準備が必要となっている。また、今までに開催された養成講座は尾瀬全域を見てもらう必要があるとの判断から3泊4日と長期の休みを強いることとなっており、開催方法についての見直しが必要となってきた。

いた。

尾瀬の大切さ、問題について実地研修を行える養成講座は当会の活動として重要なだけに継続して開催をしていくが、新規会員との整合性、開催期間や開催方法について慎重に検討をしていく必要がある。

理事会においても多くの時間を割いて、今後の在り方を中心に理事の意見交換が行われたが、結論を出すまでには至っていない。今後も担当理事である永島氏を中心に検討を行っていく。

その他、現地活動ではないが本会の活動の一つとして広報活動がある。情報公開を行う手段としてインターネットを活用したホームページの利用、当会会員の情報交換の場としてのメーリングリストの運営活動を継続する。当会の活動についてお伝えしている本会報紙はNPOとして、信頼を受けられるためにも定期刊行していく。

(若松真)

至仏山東面登山道実態調査

〜年々深刻化する荒廃地の拡大〜

はじめに

至仏山東面登山道（至仏山頂ノ山ノ鼻）は、入山者による登山道の荒廃防止や植生の保護・安全確保のため、平成元年から閉鎖されてきました。この間、国県等で登山道整備や植生復元作業を行いました。平成九年八月一日に閉鎖が解かれてしまいました。また、平成十年から毎年残雪期の登山道は植生保護のため全面的に閉鎖されています。

尾瀬ネットでは会創設の平成九年から夏季に継続して至仏山東面登山道の実態調査を実施し、その結果を緑の地球防衛基金やマスコミ・国会等を通じて「登山道再開における問題点」として発表してきました。

おりしも昨年より「至仏山保全緊急対策会議」（事務局は尾瀬保護財団）にて、保全に関する具体

的な検討が始まりました。既に過去の調査報告書は同対策会議やNACS Jに提出済みです。

調査七年目の今年も東面登山道の状況、入山者の利用実態、植生復元状況などを二回にわたり調査を行いました。その調査概要を報告いたします。

調査概要

- ① 平成十五年七月十一日〜十二日（晴れ）
- ② 平成十五年九月五日〜六日（曇り・雨）

- ① 調査メンバー
松前雅明、西山伸一、棚橋収、長島睦世、永島勲
- ② 棚橋収、永島勲

- 調査コース
鳩待峠〜山ノ鼻〜東面登山道〜至仏山〜小至仏山〜南面登山道〜鳩待峠

森林限界下の荒廃地A地点の植生はウメバチソウなど八種類以上あり、土壌も残っている。植生復元は十分可能と思われるが、土留めの丸太が傾いている箇所では一部土壌の流失も起きています。毎回重点的に調査している標高一八〇〇mのD地点（荒廃地の形から「南米大陸」と呼ばれている）は年々侵食が進み、岩石や丸太が浮き上がり、大きな岩塊や地中の岩盤の露出が確実に増えています。

D地点では尾瀬ボランティアの協力を得て植生復元作業（尾瀬保護財団で実施）が試験的に行われています。岩石で小さな棚田のような平坦地を作り、土壌を運び込みミタケスゲ等を播種した上にネットを張る。しかし、発芽はするが、毎年同じような状況で緑化の進展がまったく見られない。

標高二〇〇〇mの寒冷多雪気候と急斜面に加え、蛇紋岩という特異な自然環境下での植生復元は極めて難しい。これは関係者の共通した認識となっ

ています。

「入山者の踏み付け↓植生の破壊↓裸地化↓雪解け水や雨水で土壌流失↓岩石の露出↓入山者が左右の草地を踏み付け↓荒地の拡大」の繰り返しによって発生していると思われま

す。ネットワークによる七年間の調査で、植生復元のためには如何に「土壌の流失防止」を図るかが、最大のポイントと感

じました。土壌流失防止策として蛇籠・丸太柵・板柵・丸太柵・岩石・植生ネット等を使用しているが、十分にその効果を発揮しているとは言い難い状況

です。既に地中の岩盤が剥き出しになっていて、箇所も多数あり、荒地の拡大は深刻化する一方で手遅れの感

は否めません。登山道の改良には石畳方式が木道や木段より優れていると思われま

す。の安全面などメリットが多い。入山者への警鐘として、蛇紋岩特有のスリップ事故や木段の踏み外し事故のほかに、高天原直下の急斜面の岩石帯の自然崩落やD地点上部の大岩塊の落石などの危険も指摘しておきたい。

本調査も参加会員の協力のもとに専門的かつ科学的な調査ができる体制が整いつつあります。従来は定点観測に基づく状況把握が主体でしたが、今年

おわりに

は、具体的な復元対策を報告書にまとめることができました。高山植物の宝庫と言われる至

仙山のかけがいのない自然を、私たちは後世に確実に引き継ぐ責務があります。今後

も東面登山道の

大石武一氏が逝去

ネットワーク会員の皆さんは既にご存知と思うが、環境庁環境整

頓の初代長官で自然保護や公害問題の解決に尽力された大石武一氏が十月十九日午後、心不全のため入院先の東京都内の病院で逝去された。九十

四歳だった。密葬を親族だけで十月二十三日に行い、「故大石武一先生を偲ぶ会」を十月十八日午後二時から東京都千代田区の赤坂プリンスホテル(高橋(喬)、椎名、田中出席)、同二十四日午後二時から宮城県若柳町川南道伝前の若柳町総合体育館(佐藤(信)出席)で行った。

(高橋(喬))

大石氏は一九四八(昭和二十三年)に東北大学医学部内科助教授から衆議院議員に初当選。七一年に環境庁長官に就任した。同年、長蔵小屋三代目の平野長靖氏らの養成で尾瀬を視察し、群馬一福島の両県を結ぶ計画だった「尾瀬縦貫道」を三平峠下でストップさせる

事務局より

会員の方には本稿とともに、NPO発足時の会員名簿および当会の定款を同封いたします。

会員名簿の記載もれがあるときには、事務局まで早急にご連絡下さい。メールアドレスの連絡をいただきたい方には確認のためにメールを差し上げておりますが、何らかの不備のあった方は

名簿には記載しておりません。メールアドレスをお持ちの方で記載がされていない方は会員相互の早急な連絡手段として活用できるように登録をお願いします。定款は会員である証となるものです。噴出しないう嚴重に保管管理してください。

(椎名(宏子))

尾瀬自然保護ネットワークとは、既に解散した尾瀬の自然を守る会の自然保護指導員の有志が一九九七年三月に設立した「尾瀬の自然保護活動を実践」している民間のボランティア団体です。二〇〇三年九月四日にNPOとなり改称しました

尾瀬自然保護

ネットワーク

〒100-0014

東京都千代田区永田町

二の一七の五の二〇三

(株)SEC内

電話 03-3581-0321

FAX 03-3581-2178

代表理事 高橋 喬

事務局長 椎名 宏子

編集理事 若松 真